The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Julian Go, Postcolonial Thought and Social Theory
Author(s)	髙柳, 瞭太
Citation	共生学ジャーナル. 2023, 7, p. 277-286
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90824
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Julian Go
Postcolonial Thought and Social Theory
Oxford University Press、2016 年、264 頁

髙柳 瞭太*

1. はじめに

『ポストコロニアル思想と社会理論』は、シカゴ大学の教授であるジュリアン・ゴーによって執筆されたものである。ゴーはアメリカの帝国主義やポストコロニアル思想及び社会理論に関する数多くの著作を世に問うている(1)。「まえがき及び謝辞」では本書を書くに至った経緯が明かされている。それによればゴーは、シカゴ大学で社会学を研究していた大学院生時代に「ポストコロニアル研究」という学問領域に出会った。彼はこの領域に惹かれ、社会学がポストコロニアル研究における議論から学ぶことができるのではないかと考えた。しかし、この考えを、社会学を専門とする指導教員に伝えても「なんか変だね（it's a little weird）」と言われ、ポストコロニアル研究を専門とする学者に伝えても、「関心は正しいが、分野が違う（right interest, wrong discipline）」と返答されたという。

ゴーによれば、社会理論とポストコロニアル思想は異なる文脈において確立された学問分野である。両分野のすれ違いを肌で感じた彼は、本書において、それらを「和解」させることを試みている。社会理論とは社会科学の抽象的な形態であり、人々の間の諸関係の動態（dynamics）を体系的に捉えたり、社会的な諸関係、ヒエラルキー、変化を概念化し、説明したりする研究を指す。ゴーによれば、社会理論は西洋における帝国主義(2)の歴史の中で生まれたのであり、したがって、ヨーロッパ中心主義的な考えから完全には自由ではない。他方でポストコロニアル思想(3)は人文学において論じられ、帝国主義やそれが残した遺産の数々を批判する反帝国主義の立場を取る。このような相反する歴史的背景を基に形成された 2 つの学問分野における議論を組み合わせ、ポストコロニアル社会理論を提示することが本書では目指されている。

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；u588376h@ecs.osaka-u. ac.jp

2. 本書の概要

本書は序論「帝国を越えた社会理論？」に続く 4 つの章と結論「第 3 の潮流に向けて」からなる。

本書の前半部分ではこれまでのポストコロニアリズムに関する議論を整理したうえで、それらが社会学に提起する問題について論じられている。

第 1 章「ポストコロニアル思想の諸潮流」において、ゴーはポストコロニアル思想を 2 つの潮流に分類して、議論を整理している。第一の流れは反植民地主義の立場から展開された諸々の議論である(4)。そこにはフランツ・ファノン（1925-1961）やエメ・セゼール（1913-2008）、W.E.B. デュボイス（1868-1963(5)）らが含まれる。第二の流れは 1970 年代後半に米国で文学研究からはじまり人文学全般へと拡がっていった一連の議論であり、一般的にポストコロニアル研究として知られているものである。代表的な論者としてはエドワード・サイード（1935-2003）やホミ・バーバ（1949-）、ガヤトリ・スピヴァク（1942-）、サバルタン・スタディーズ・グループなどが挙げられる。

第 2 章「ポストコロニアルな難題」においては、社会科学へのポストコロニアル思想の貢献の一つとして、帝国の文化の内部において確立された社会科学が今なお有している、分析におけるヨーロッパ中心主義的な傾向への警告を挙げている。

本書の後半では、既存の社会学における議論から、ポストコロニアリズムを論じる際に用いることができる 2 つの方法論が提示されている。

第 3 章 「諸関係を再びつなぎ合わせること」では、〈西洋〉が〈東洋〉の被植民地地域から切り離されて論じられていることを問題視し、フランスの市民革命とイギリスの産業革命を例に、各地域の双方向的な影響関係に注目する視座を提示している。

第 4 章 「サバルタンの立場」では、社会学に見られる普遍主義を批判し、ポストコロニアリズムの視座にフェミニズムにおけるスタンドポイント理論に関する議論を結びつけることで、その乗り越えを試みている。

3. 社会学への問題提起

ゴーによれば、社会学は常に帝国主義に加担してきたわけではない。しかし、西洋において確立された社会理論及び積み上げられてきた諸研究は、決してヨーロッパ中心主義から自由ではなく、研究者の関心や研究内容、方法は少なからず帝国内部にある主要都市という社会的位置によって形作られてきた（p.78）。ポストコロニアル思想が問題とするのは、こうした社会学の諸研究に内在する、ヨーロッパ中心主義的な傾向である（p.68）。

このことについて論じるために、ゴーは大都市中心主義（metrocentrism）という言葉を用いている。大都市中心主義とは、ヨーロッパを中心に位置づけた普遍主義を一般化した用語であり、ある地域に根差した見方（スタンドポイント standpoint）に由来するナラティブや概念、カテゴリーあるいは理論を、それらが普遍的であるという想定の下、世界の他の地域にも当てはまることである（p.94）[6]。この言葉でゴーは、地域ごとの差異を顧みずに、ある特定の地域（例えばヨーロッパ）で培われた学知を普遍的なものとして採用することに対して警鐘を鳴らしている。なぜなら、こうした態度は、諸地域の間にあるはずの差異を捨象し、研究者の見方に還元することになり兼ねないからである。

ゴーによれば、ファノンによるフロイト批判はまさにこの大都市中心主義に関するものである。フランスの旧植民地であるカリブ海の島マルチニックに生まれたファノンは、植民地に特有な状況を理解するために、フロイトの理論を用いるのは不適切であると論じている。なぜならその理論は、オーストリアの中流階級の人々が抱える神経症を合理的に理解するためのものだからである。ファノンによれば、フロイトが理論化したエディプス・コンプレックスは、ニグロの生涯においては経験されることがない（Fanon 1952:123）。このことを論じるためにファノンが注目するのが、ヨーロッパに暮らす人々と植民地下にある人々が直面する社会状況の差異である[7]。ファノンはフランスで精神分析を学んだ経歴がある。しかし、植民地に暮らす人々にみられた症状を既存の精神分析の理論に還元することはなかった。むしろ彼が試みたのは植民地に見られる精神障害の特異性を引き受けた上で、自らの実践を展開することである。このようにポストコロニアル思想は、

ある限られた地域に暮らす人々の経験に由来する理論的な枠組みが、いかなる場所においても、そして誰に対しても適応しうる、という大都市中心主義の立場を退ける。

4. ポストコロニアル社会理論に向けて

それでは社会学にはいかなる視座が求められているのか。ゴーはポストコロニアル関係主義（3 章）[8]とサバルタンの立場（4 章）という 2 つの議論を提示している。ただし本稿では、紙幅の都合上、両方の議論を扱うことは適わない。したがって後者に絞ってその概要を確認する。

ゴーはフェミニズムにおけるスタンドポイント理論 [9]を検討することで、社会学に残存するヨーロッパ中心主義的、あるいは大都市中心主義的な普遍主義を乗り越えようとする。そもそもスタンドポイント理論とはいかなるものか。フランスの植民地主義に関する全く異なった 2 つの見方を例に考えてみよう（2016:153-154）。1 つ目はアルベール・サロー（1872-1962）の見解である。彼はフランス第三共和政の首相やインドネシアの総督を務めた経歴を持つフランス帝国主義の重要なイデオローグの一人である。帝国内の植民地支配の行方を左右する立場にあったサローは、帝国の頂点に座り、パリの快適で豪華な権力の回廊に住み、仲間の役人や行政官と共に働いていた。したがって、彼が地上の恐怖について目にすることはめったになかった。このような社会的立場にあるが故に、サローは植民地主義を、害を及ぼすものではなくむしろ有益なものとして思い描いていた。もう 1 つはファノンの見解である。彼は植民地で生まれた黒人であり、地上から植民地の状況を目撃してきた。したがって、彼の社会的立場からは世界は異なったように見えた。ファノンにとって帝国は文明化をもたらすものではなく、むしろ偽善であり、暴力なのである。手短にまとめると「帝国の支配者と植民地主義の被害者は異なる社会政治的な位置を占めるため、異なった経験を持ち、植民地主義を別様に捉えている（p.154）」のである。このようにスタンドポイント理論は私たちがある特有の立場に依拠しているという視座を提示する。

社会学者がスタンドポイント理論を受け入れることは、ある特定の社会

状況に由来する理論の特殊性を認めることを意味する。したがって、その理論を一般化して、他の社会的現実にも適応可能なものとして捉えることができなくなる。社会科学において、「科学性」と呼ばれるものは苦境に陥ることになるだろう。そこでゴーは次のように問う。サローやファノンの主張が社会的に規定されていることについては直ちに同意することができるだろう。しかし、自らが立脚する理論や展開する議論もまた社会的に規定されていることを、どれだけの社会学者が直ちに受け入れることができるだろうか、と（p.155）。

ところで、大都市中心主義を退けるために、以上に見てきたようなスタンドポイント理論を採用する時も慎重であらねばならない。なぜならこの方法論は少なくとも 2 つの批判に突き当たることになるからである。1 つ目はスタンドポイント理論が本質的なアイデンティティに依拠しているのではないかというものであり、もう 1 つは特定の見方に依拠することで、議論が諸個人の経験にとどまっており、権力の諸関係やより大きな支配構造を分析できずにいるのではないかというものである。

これらの課題は、すでにフェミニズムの議論においては乗り越えられている。まず、本質主義の問題については、立場は生物学的にではなく、社会的に規定されているということが繰り返し主張されてきた。それでは立場が社会的に規定される中で、いかなる立場が問題となるのか。女性か、黒人か、アジア人か、トランスジェンダーか、あるいは学生か。ゴーによれば、重要なのは社会構造に組み込まれた社会的経験であり、その限りにおいていかなる社会的立場も問題になり得る(10)。「従属的な位置が知への特権的な接近方法を提示するというわけではない。それらは異なる接近方法を提示しているのである（p.157）」。あらゆる知は社会的に位置づけられている。いわゆる客観的な現実はある事象の一つの側面を示しているにすぎず、同じ事象は異なった形で知覚され、知られ得る。知の特権性の問題は、社会における知の位置づけの問題に置き換えられたと言える。

続いて、ある立場に依拠した議論は個々人の経験にとどまるのか、という問いについて考えていきたい。そもそも普遍性を退けた視座に依拠してもなお、問題を個人の経験を超えたより一般的なものとして提示することは可能なのか。もし可能であるとすれば、それはいかにしてか。これらの問いについてゴーはドローシー・スミスの「制度的エスノグラフィー」に関する

議論から示唆を得ている（2016:158-159）。スミスによれば、スタンドポイント理論と権力構造の分析は両立し得ないものでは決してなく、むしろ同じ分析の異なる部分を構成しているのだという（Smith 2005）。彼女が提示する「制度的エスノグラフィー」は、研究の関心となる主体の立場を調査することから始まる。例えば、教育システムに関するある研究で、スミスは学長や教職員の立場から分析を行わなかった。反対に生徒の母親たちがどのように学校を経験しているのかを知るために、母親たちをインタビューし、彼女らの活動を観察することから始めた。続いて母親たちの立場を確認した上で、彼女らの経験を可能にする人間関係や学内の組織、制度などを分析した。ここで立場を確認することは研究の始まりに過ぎず、調査の対象となっているのは母親たちではない。むしろ彼女たちの経験を規定し、形作っているネットワークや社会構造、教育システム、あるいは制度こそが対象となっているのである（p.214 第 4 章註釈 18）。

以上の議論を下敷きにしてゴーはサバルタンの立場を提示している。サバルタンは人種、文化あるいは地理によって規定された本質的なアイデンティティではない。それはむしろ帝国主義的・大都市中心主義的な立場から区別されることによって見出される関係的なアイデンティティである。サローとファノンの例に立ち戻って考えてみよう。サローの社会的位置とは、植民地を経営するフランスの頂点である。他方でファノンはその植民地に生まれた黒人である。この関係性において、ファノンはサバルタンの立場に位置づけられる。ただしこのことは、ファノンに特権的な地位が与えられることを意味しない。なぜなら、ファノンは植民地においては男性であり、フランスに留学した経験を持つエリートの位置を占めるからである。したがって、他のアクターがファノンと比較してジェンダーにおいて従属的な立場にあるか、教育の機会を得られなかったかする時、そのアクターはファノンとは異なるサバルタンの立場に位置づけられる。

それではサローとファノンの関係において、なぜサバルタンの位置を占めるファノンの見方がより重要であると言えるのか。それはファノンが依拠する見方が、帝国内に築き上げられた知の体系において、長らく抑制され、排除され、周縁へと追いやられてきたからである。それ故、ポストコロニアル社会学が目指すのは、グローバルな階層において抑圧されてきたサバルタンの立場に注意を払い、そこから社会的現実や歴史を記述することであ

る[11]。

5. おわりに

ゴーが指摘するように社会科学は〈西洋〉において培われてきた学問である。そしてそれを受容する私たちもヨーロッパ中心主義的あるいは大都市中心主義的な立場に依拠する危険性を常に秘めている。例えば私たちが問題を設定する時、それは学者としての私たちの経験から少なからず影響を受けたものとなるだろう。だからこそ今一度、研究における自らの立場を問い直す必要がある。ファノンのニグロとしての経験は、フロイトをはじめとした西洋の思想に疑問を抱き、フランス植民地主義の構造に切り込む契機となった。ただしこれは、抑圧された立場にない者にはこうした研究ができない、ということを意味するのではない。ゴーによれば、フランスの社会学者であるブルデューは、現地の研究者と共同で当時フランスの植民地であったアルジェリアに暮らす人々の経験についてインタビューや調査を実施し、エスノグラフィーを執筆した。それらを踏まえて彼は、植民地主義は人種化された支配体系であるというファノンと類似した議論を行ったという（2016:171-172）[12]。スピヴァクは自らが学術世界において培った知を一旦脇に置き、人々に寄り添うことからはじめる姿勢を「学び捨てる（unlearn）」という言葉で表現している（スピヴァク 1998:74）。それにより、抑圧された人々の語りに耳を傾けること、そして彼／女らの経験から出発して、社会構造に根差した歪みについて批判的に取り組むことが社会学に求められている[13]。

加えて本書は、共生学にも多くの重要な示唆をもたらすことになるだろう。河森らによれば、共生とは「さまざまな違いを有する人々が、それぞれの文化やアイデンティティの多元性を互いに認め合い、対等な関係を築きながら、ともに生きること」である（河森・栗本・志水 2016:4）。だとすれば、共生を理念として掲げることは、共生が実現できていないこと、換言すると現実社会において差別や不平等が深く根づいており、他者が疎外されていることを前提としている。ゴーが提示するポストコロニアル社会理論は既存の知の体系から排除されてきたサバルタンの立場に依拠した研究を

提唱している。こうした研究は、共生社会の実現に向けて検討されるべき諸問題を前景化し、学術的に取り組むための視座を提示することになる。以上からも明らかなように、本書は社会学ないし共生学に取り組む者によって読まれるべき重要文献である。

注

(1) 例えば、*The American Colonial State in the Philippines: Global Perspectives*（2003）、*American Empire and the Politics of Meaning: Elite Political Cultures in the Philippines and Puerto Rico During U.S. Colonialism*（2008）、*Patterns of Empire: the British and American Empires: 1688 to Present*（2011）、*Global Historical Sociology*（2017）などがある。

(2) 著者による「帝国」の定義については、序文の註釈 1（p.203）及び *Patterns of Empire*（Go 2011:5-12）における議論を参照。以下、特に断りがない限り（）内の頁数は本稿で取り上げた著作のものである。

(3) 「ポストコロニアリズム」という用語については『ポストコロニアル事典』における説明も参照されたい（アシュクロフト・グリフィス・ティフィン 2008: 215-222）。

(4) ただし、これらの研究はゴーによって遡及的に第一の流れとして位置づけられたものであるということは強調しておかなければならない。時期的に考えても多くの地域は依然として帝国からの独立を果たしておらず、「ポスト」植民地主義というよりはむしろ、反帝国主義、脱植民地主義が目指されていた頃である。

(5) ゴーはアメリカの黒人社会学者であるデュボイスについて社会学における彼の歴史的役割や考えが周縁化されてきたことを指摘している（p.12）。

(6) したがって大都市中心主義はヨーロッパで論じられている議論を他の地域へ適応することだけを意味するわけではない。ここで問題となっているのは、ある特定の地域における議論を、その特異性を考慮することなく、他の地域にも当てはめることである。

(7) 『黒い皮膚、白い仮面』（1952）第 6 章において、Fanon は、ニグロの経験の特異性を強調するために同章を「ニグロと精神病理学」と名づけた旨を書いている。なお、同書においては、その議論の射程が黒人に絞られていた。しかし、彼の晩年の著作である『地に呪われたるもの』（Fanon 1961）第 5 章においては、植民地原住民であるアルジェリア人に加えて、入植してきたヨーロッパ人の症例も若干にではあるが紹介されている。ファノンの議論におけるこの移り変わりの意義については更なる議論の余地があるが、このことは植民地に特有の社会構造が原住民のみならず入植者の精神状態にも少なからず影響していたことを示唆している。

(8) 玉城福子（2022）は『沖縄とセクシュアリティの社会学』の中で、ゴーが提示したポストコロニアル関係主義を採用している。そして第二次世界大戦中の日本軍による「慰安婦」をめぐる問題や、米軍占領期の女性への性暴力をめぐる問題などがいかに正当化されてきたかを分析することで、「ポストコロニアル・フ

ェミニズム」という視座から沖縄の歴史を捉え直すことを試みている。また、カスペルセンとガブリエルは、こうした関係的社会理論（relational social theory）がヘーゲルやマルクス、アルチュール、フーコー、ブルデューらの議論にも見られることを指摘している（Kaspersen & Gabriel 2013:55）。

(9) フェミニズムの議論におけるスタンドポイント理論の遍歴については児玉由佳（2013）を参照。

(10) したがって、ゴーによれば支配的な位置もまた社会的現実について重要な示唆を提供し得る（p.214 第 4 章註釈 16）。

(11) サバルタンの立場に依拠したポストコロニアル社会学の試みに重要な示唆をもたらすだろう研究に、石原真衣の『〈沈黙〉の自伝的民族誌』がある（石原 2020）。同書において著者はアイヌの出自「を持つ」ことと、アイヌ民族「である」ことを区別している。その上で「和人」と「アイヌ」両方の出自を持つが、いずれの立場にも自らの拠り所を見出すことができなくなった石原は、自らを「サイレント・アイヌ」として位置づけ、自己の存在を歴史化することを試みている。また、方法論として、自伝的民族誌（autoethnography）という手法を採用し、石原は自身の経験や家族の歴史を紐解きながら、自らに沈黙を強いているのは何かを論究している。

(12) なお、ゴー（2013）は、ブルデューの仕事をポストコロニアル理論として捉え直すことを試みている。

(13) このことを実践した先駆的な研究として丸山里美の『女性ホームレスとして生きる』を挙げることができるだろう（丸山 2021）。

参照文献

アッシュクロフト，ビル、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィン 2008『ポストコロニアル事典』木村 公一編訳、南雲堂。

石原 真衣 2020『〈沈黙〉の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー）—サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会。

河森 正人・栗本 英世・志水宏吉編 2016『共生学が創る世界』大阪大学出版会。

児玉 由佳 2013「第 1 章スタンドポイント・アプローチについての批判的検討」児玉由佳編『ジェンダー分析における方法論の検討』（調査研究報告書）pp.6-15、アジア経済研究所。

スピヴァク，ガヤトリ 1998『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳、みすず書房。

玉城 福子 2022『沖縄とセクシュアリティの社会学—ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す沖縄戦・米軍基地・観光』人文書院。

丸山 里美 2021『女性ホームレスとして生きる[増補新装版] —貧困と排除の社会学』世界思想社。

Fanon, Frantz. 1952. *Peau Noire Masques Blancs*. Paris: Éditions du Seuil.

————. 1961. *Les Damnés de la Terre*. Paris: Éditions Maspero.

Go, Julian. 2011. *Patterns of Empire: The British and American Empires, 1688 to the Present.* Cambridge: Cambridge University Press

————. 2013. Decolonizing Bourdieu: Colonial and Postcolonial Theory in Pierre Bourdieu's Early Work. *Sociological Theory* 31(1):49-74.

Kaspersen, Lars Bo & Gabriel, Norman. 2013. Survival Units as the Point of Departure for a Relational Sociology. In François Dépelteau & Christopher Powell(eds.). *Applying Relational Sociology: Relations, Networks, and Society*, pp.51-81. New York: Palgrave Macmillan.

Smith, Dorothy E. 2005. *Institutional Ethnography: A Sociology for People*. Lanham: AltaMira Press.